

§ 0. 「冒頭言」

前期を通じる主題は「文明」と「文明以前」との相違を比較・考察することにある。後者が正確な意味の「文化」。前期と後期では異なった人間社会の様相を前提として講義する。ケジメを付け、混同しないように。

前期の基本文献はレヴィ＝ストロース『野生の思考』（みすず）、同『構造人類学』（みすず）など。これら特に前者は早い機会にぜひ一読をすすめる。同じ著者の『悲しき熱帯』（中公世界の名著）は興味深いアマゾン地方のフィールドノート。（彼には『ブラジルへの郷愁』[みすず]という写真集がある。イメージ喚起力がすばらしい。）

モノグラフとしては、日本の人類学者による『熱帯林の世界』（東大出版全7巻）も平行して読むとよい。中でもマレー半島狩猟採集民に関する『吹矢と精霊』は気分がよくなる。

注意事項：前期に使用する「宗教」という語は、とくに断らないかぎり「原始宗教」のことである。後期に言及する「宗教＝普遍宗教あるいは世界宗教」とは全く異なるものと考えよう。「原始宗教」は、前期に述べる「文化」の総体とほぼ同義であり後期に扱う文明下の単なる宗教にすぎない普遍宗教＝世界宗教とは全く別のもの。

内容的には後期の講義にも関連するが田仲一成中国演劇史東大出版会は、演劇史の見地から、前期に講義する問題により洞察を与えてくれるので読むことをすすめる。

前期の内容は、講義では平易な事例を上げるようにするが、私たちの惰性化した思考習慣のせいで、実は決して易しいものでない。例示された文献をよく読み、自分で考えること。前・後期を通じて、諸君が教室で参考書を一冊だけ教えてくれと言わないこと。これは恥ずべきことなのでとくに注意してほしい。この講義と、そのなかで上げる全参考図書とを手軽に一冊にしたマニュアル本などは存在しない。参考図書は自分で読まねば意味がない。大学にマニュアルはあり得ない。

§ 1. 「主題：文化には固有のテリトリーがある」

文化は固有の「テリトリー」を欠くことができない。テリトリーを奪われた生

物を考えたければ、動物園を想像せよ。テリトリーを風土と呼ぶことがある

人間集団はこのテリトリーと共存できるまで、長い時間をかけて独自の行動様式を作り上げる。これが「文化」である。

では文化の作り手は誰なのか、という問題を当然考える必要がある。社会学者や社会学者は「文化は人間が作る」と考える。これは常軌を逸した誤解である。(貨幣はテリトリーを知らない。市場経済社会である近代社会とは、文化のない社会である。) マックス・ウエーバーなど第2世代の社会学者以来、社会学者の中にも「社会と文化は人間が作る」という度し難い謬見が常識化した。

和辻哲郎に『風土』(岩波文庫所収)という名作がある。その他、近世に風土の問題を論じ、近代人が忘れてしまった重要な著述にモンテスキュー『法の精神』(岩波文庫所収)がある。この作品の方が、同時代のルソーなどよりよほど重要である。また、貨幣が風土を知らず、風土を破壊することについては、社会学者ジンメルが『貨幣の哲学(著作集白水社)で論じている。以上のどれかを必ず読むこと。

結論として、「文化」は「共同体」が作るものである。この共同体とは、いま生きている人間だけで構成される集団ではない。

## § 2. 「主題：文化は人間集団が変化しないためにある」

"The Encyclopaedia Britannica"はつぎの推計を掲げている。この意味するところを考えてみよ(便宜上原文を\*で区切る)。

\*It is generally agreed that only 5,000,000-10,000,000 humans i.e., one one-thousandth of the present world population were supportable before the agricultural revolution of about 10,000 years ago.

\*By the beginning of the AD, 8,000 years later, the human population approximated 300,000,000, and there was apparently little increase in the ensuing millennium up to the year AD 1000. Subsequent population growth was slow and fitful, especially given the plague epidemics and other catastrophes of the Middle Ages.

\*By 1750, conventionally the beginning of the Industrial Revolution in Britain, world population may have been as high as

800,000,000. This means that in the 750 years from 1000 to 1750, the annual population growth rate averaged only about one-tenth of 1 percent.

熱的非平衡系である地球の上で生物が生きてゆけるのは、遺伝子の中に「変化しない」ための情報が書き込まれているからである。人間も同じである。遺伝子を下のレベルと呼べば、文化はそれより上のレベルを受け持つ記憶である。熱非平衡系の中で生きることがどのようなことか『不思議の国のアリス』から取った「赤の女王」という寓話がある（リドレーの同名の著作 *The Red Queen* を見よ。邦訳『赤の女王』翔泳社）

変わらないことに、なぜ重要性があるかを考えて見よ。

### § 3. 「主題：自然と文化という対比について」

「赤の女王」からも分かるように自然との共生は生やさしいことではない。人間集団（群、共同体）は、生存という目的のために作られる。「自然と文化」とを人間集団の意識の中で対立する両極として正確に認識したのはレヴィ＝ストロースの功績である（その精神史的背景については上述の自伝『悲しい熱帯』を読むとよくわかる）。

この対立が興味深いことは人間の身体の置かれる位置を考えるとよくわかるだろう。かれは、文化は自然にたいする「人間側の分類の体系」だと考えている。またかれは、文化とは「自然と人間との変換の体系である」とも考えている。この「変換」とは何のことか熟考せよ。

### § 4. 「主題：システムとはなにか」

システムとは「解体作用の働く『環境』のなかに置かれた」固有の機能を持つ構成部分の、特定の規則にしたがった集りである。この定義の前半の「」内に注意すること。システムにはそれが置かれた固有環境がある。このことに留意するには、文明の中のシステム（例：交通システム、社会・経済システム、コンピュータシステムなど）に注目するのではなく、宇宙、生物、生態などの自然のシステムに関して読書する方がよい。前者と後者は異質のものである。現代の研究者はシステムにたいする「外界の解体作用」に関して認識が薄い。この理由は現代

の研究者が、社会・経済システムをはじめ、あらゆるシステムを機械のように作りうる何かだと考えているからである。しかし、生命は作れないものに属することは明らかである。

「構造と出来事」という対比について。これもレヴィ＝ストロースのものである。かれによると、構造とは「歴史を排除するための工夫」のことであるとされる。システムから時間を抜いてしまうと構造になる。なぜこれが必要かは「進歩、発展、革命」と「進化」の相違を考えることに等しい。レヴィ＝ストロースのいう構造とは、環境の解体作用を回避するために、人間が長い長い時間の中の「自然淘汰」を経て作り上げたシステムのことである。多くの社会学者がいう構造(社会構造)とは別物である。

システムとしての文化のイメージの先駆者であった機能主義人類学について。社会学者はこの「機能」という言葉を既成のものとして受容した。この結果、社会学者は「機能」という言葉の遣い方に反省が欠けることが多くなった。

#### § 5. 「主題：構造の典型としての親族組織」

構造の典型は親族組織 (kinship relations) である。これは風土・環境によって形成された婚姻規則の結果特定のかたちを持つもの。婚姻規則は交錯いとこ婚、多夫多妻、一妻多夫、一夫多妻、一夫一婦婚などである。

ただし親族組織の実体は、単なる性交や生殖のための婚姻組織ではない。群生活をする共同集団全体の世代継承のためのあらゆる働き(機能)を備えた組織である。親族組織は社会の根元である。文書としては『論語』『史記』など中国(父系性だが)がその宝庫である。地中海世界にさえ、下記のギリシャ悲劇や『旧約聖書ルツ記』などに記述がある(ただし東西を問わず、文字で残されたものには文明がこれを破壊した痕跡。も同時に残る。

近代の核家族は国家によってほとんどの機能を剥奪された親族組織である。核家族に残された働きは「消費」だけである。現代の経済機関、政治機関、教育機関などのあらゆるものが果たす機能を、かつての親族組織は保持していた。

いくつかの事例を、フォックス Robin Fox; *Reproduction & Succession*(平野訳『生殖と世代継承』法大出版 2001)によって読むこと。

下記はニューメキシコでインディアン部族に養子となった経験のある R. Fox が上げた事例である。一例として上げる。

[コチティのクランの一つ(榎 ハパニ)の事例:「おまえは私たちの子、私たちの兄弟、私たちのニェニェ(女性が母の兄弟と姉妹の息子と呼ぶ言葉。おまえは私たちを食べさせたり家の手入れをする必要はない。)それは私たちの夫がする。だがおまえは私たちの子供たちの世話をし、彼らが古いしきたりを学び、新しいことに抜け目なく立ち向かうようしつけるのだ。彼らが結婚して子供たちに親切に、年老いた者に親切に、また彼らが悪霊から安全であるように守るのだ。

この時、男の長老はつぎのように述べた。

「おまえは今から私たちのナワ(男子と彼の母の兄弟たちの関係を指す、ニェニェと対をなす言葉。私たちは永遠におまえの親戚。年長者の世話をし、子供たちを教)育するのだ。おまえは自分のクランの女と結婚してはならず、そのことについては私たちの教えをあおぎなさい。おまえは「姉妹たち」の子供を世話し、彼らに正しい道を教えるのだ。おまえの「母たち」とナワにおまえに対して正しい道を行わせるのだ。おまえはハパニであり、おまえの姉妹たちの子供たちも、雲の中のシワンナ(祖先の霊)に加わり人々(クランの成員)とともに永遠に踊るとき〔死後のこと〕まで、ハパニなのだ」]。

## § 6. 「主題：文化と個体の関係」

冒頭に明確に知るべきことは「文化の担い手は共同体であって個人ではない」ということ。

同時にこの命題は「文明果つる処」である近代社会が固執している常識と激しく衝突するものであることを知る必要がある。だから「文明」と「文明以前」とを明確に分けて思考するひつようがあるのである。同時にそれが文明とは何かを知る前提にもなる。

「種としての個人(l'individu comme l'espèce 『野生の思考』)にとともなうさまざまな歴史的・理論的問題について。

また「死」の定義について。関連文献として、死に関する優れたヨーロッパ近世・近代の文化史の例としてアリエス『死を前にした人間』(みすず)など。とくに同書第十二章「倒立した死」が参考になる。

しかし死に関する重要な素材が豊富に保存されているのは、最初に上げた『中国演劇史』や日本・韓国の民俗誌など、アジアの文献である。

文化の連続性と個体の非連続性について。ここで「死」の問題がきわめて重要

になる。現代の社会諸科学は、死の問題を忘れた学問の典型的な事例だが、これでは文化を論じることが出来ない。

死は文化と個体（自然）の両方から、異なった角度で見られる（死はなぜしばしばメデタイとされるのか。）

#### § 7. 「主題：時間のイメージ」

続「死」の定義。

エヴァンズ = プリチャード 『ヌアー族の宗教』（平凡社文庫 Evans=Prichard, Nuer Religion.）のなかで ruah adonai とギリシャ人のプシュケーや中国人の魂魄の観念について、示唆的な文章がある。

気とその袋である肉体という観念について。

循環としての（周期的）時間、延長としての時間、切断としての時間などは、異なった時間の観念である。

物語の中の時間の取り扱いには、歴史上の一時点を明示するものと、そうでないものがある。説話の世界に多いのは後者である。後者の方が古形と考えられる。なぜなら、循環としての時間には時点を明示する必要がないからである。循環がほころびる時、時点を示す必要が生じる。（たとえば『春秋左氏伝』の記述。逆に『創世記』の冒頭に見るようなクロノロジーはもともとは循環であったものが「宗教」によって切断された結果である。）

循環としての時間のなかで個体の死の現象は文化に大きな問題をなげる共同体と個体は、この時点で両立点と対立点とを知ることになる。文化の時間と個体の時間との亀裂。先記の連続性と非連続性はこのように換言することができる。

#### § 8. 「主題：主題：循環と祭祀について」

死に関する石とバナナの寓話。（出典忘失エリアーデ『生と再生』東大出版会か？）。ただし類似のモチーフは起源神話の中には頻出する。

祭祀の根源は「循環が維持されるようにという強い共同体の願望」である。循環が途絶えることは、きわめて恐ろしいことなのである（現代人にとっての循環の途絶とは、水資源の循環やエネルギー資源による空気や生活必需品の循環の途絶の方が分かりやすい例だろう。にもかかわらず、そのようなことは起こらないという根拠のない前提のもとに、現代人は生きている。また、起きたとしてもそ

の恐ろしさは、カウンセリングを受けなさいなどといった個人心理学の次元で解釈される。)

プリミティブな循環の図式(たとえば、ライヘル=ドルマトフ『デサナ アマゾンのシンボリズム、岩波書店などを参照。その他、循環のイメージも様々の未開説話の中に頻出する主題である。)デサナの宇宙観図は別ファイルを見よ。

#### § 9. 「主題：祭祀・儀礼の本質」

再説：祭祀・儀礼の根源は循環が維持されるようにという強い共同体の願望にあること。

天、地上、地下の楽園など(デサナ参照)のようなプリミティブな循環宇宙の像(imago mundi)が、祭祀の分類にも有益になる。

- 1) 共同体の循環にかんする祭祀
- 2) 個体の循環にかんする祭祀

以上の二つは関連が深いが異なった主題である。1)の方が早く術語化され「通過儀礼」と呼ばれている。ファン・ヘネップ『通過儀礼』(弘文堂)

#### § 10. 「主題：祭祀と供犠について」

通過儀礼について。通過儀礼は、実際は1)、2)双方に関係するものである。いいかえれば個体だけでなく共同体にも通過儀礼の論理が適用されるのである。「聖」と「俗」、あるいは「ハレ」と「ケ」という通説は必ずしも本質的なものではない(このことについて、たとえばヴィクター・ターナー『儀礼の過程』(紀伊国屋書店)参照。

イスラエルの「契約」と原始的神観念。

#### § 11. 「主題：続・祭祀と供犠について」

罪観念に見る「ミスチヴァスな神」「気紛れな神」という観念について。これは祭祀の根元にある思想である。原始宗教の神は、忘れっぽく、人間そっくりでいたずらな者という存在である(『ヌアー族の宗教』を参照。原始宗教の神はどの場所においてもその文化のなかに住む人間そっくりである。神を「超自然」の存在としたのは、後世の文明化した宗教の仕業である。

気紛れで忘れっぽいから、たえず供犠によって注意を喚起する必要がある。ま

た、このようなものと同レベルにある道教の「鬼」について（道教の鬼については『搜神記』『酉陽雜俎』（平凡社東洋文庫に現代訳）などを参照。

まったく異なった土地のものである、『イーリアス』や『出エジプト記』（二九）『レヴィ記』（一六）など、祭司文書に収録された神や罪と贖罪のイメージも参照。

神の像は、人間の自己像である。

#### § 12. 「主題：魔術について」

例えば先に見た大贖罪日の儀式（過ぎ越しの祭）は、それ自体もともと一つの循環宇宙論とこれに基づく比喩から成立している。比喩は、もっとも古く、もっとも根強い認識の形態である。比喩による認識は、既知のもの、いかに扱うべきかを知っているものと、未知のもの、まだ知らないものとの間に通路を設けることからなる。きわめてありふれた比喩の例＝人間の性交と宇宙・事物の生成。正月祭、豊饒儀礼等。

\*現代人は魔術に無縁か、という設問を自らに発してみよ。

フレーザーによる魔術の分類（フレーザー『金枝篇』（岩波文庫）について。エドマンド・リーチが、この分類をもとに、魔術を比喩による認識と関連させて理解することを提案している（リーチ『文化とコミュニケーション』紀伊国屋書店）

#### § 13. 「主題：宇宙像としての文化と生」

時間の再生。エリアーデは、正月祭の祖型がいたるところで見られることを宇宙開闢・天地創造神話の反復であると示唆している。すなわち時間も再生される必要があるのだと。（エリアーデ『永遠回帰の神話 - - 祖型と反復』未来社）。時間が再生されることは、いうまでもなく生が再生されることである。さらに生が再生されることは「個体の生」を宇宙の循環と反復のなかに引き写してしまうことである。

文化とは、このように宇宙像のなかに生を写しこんでしまう知恵の体系であり、同時にこのための宇宙像そのものである。反復的な宇宙像に引き写されることによって生は不死性を獲得するが、この時二つの事柄が生起する。

第一に、個体が個ならざるもの、種に帰一すること。

第二に、この引き写し自体が絶え間ない反復によって保証されなければならないこと。

前者については、二〇世紀の生命科学がはじめてこのことを遺伝子レベルで追認した。(ドーキンス『利己的な遺伝子』などを参照)。

後者、すなわちこの引き写しが保証されることは、祈りの対象である。これが祭祀の存在を説明する。